



府食第 112-5 号
平成 17 年 11 月 22 日

食品安全委員会
委員長 寺田 雅昭 殿

動物用医薬品専門調査会
座長 三森 国敏

オフロキサシンを有効成分とする鶏の飲水添加剤(オキササルジン液)の
再審査に係る食品健康影響評価について

平成 16 年 10 月 29 日付け 16 消安第 5870 号をもって農林水産大臣から、平成 17 年 9 月 13 日付け厚生労働省発食安第 0913002 号をもって厚生労働大臣から、食品安全委員会委員長に意見を求められたオフロキサシンを有効成分とする鶏の飲水添加剤(オキササルジン液)の再審査及びオフロキサシンの残留基準設定に係る食品健康影響評価について、当専門調査会において審議を行った結果は別紙のとおりですので報告します。

(別紙)

動物用医薬品評価書

オフロキサシンを有効成分とする鶏の飲水添加剤(オキサルジン液)の再審査に係る食品健康影響評価について

2005年11月

食品安全委員会 動物用医薬品専門調査会

〈審議の経緯〉

平成16年10月29日

平成16年11月4日

平成16年11月16日

平成17年6月21日

平成17年7月21日

平成17年8月29日

平成17年9月13日

平成17年9月15日

平成17年9月22日

平成17年9月22日－10月19日

平成17年11月22日

農林水産大臣から食品健康影響評価について要請、関係書類の接受

第68回食品安全委員会(要望事項説明)

第20回動物用医薬品専門調査会

第29回動物用医薬品専門調査会

第31回動物用医薬品専門調査会

第32回動物用医薬品専門調査会

厚生労働大臣から食品健康影響評価について要請、関係書類の接受

第111回食品安全委員会(要望事項説明)

第112回食品安全委員会(報告)

国民からの意見情報の募集

動物用医薬品専門調査会座長から食品安全委員会委員長に報告

〈食品安全委員会委員〉

委員長	寺田	雅昭
委員長代理	寺尾	允男
	小泉	直子
	坂本	元子
	中村	靖彦
	本間	清一
	見上	彪

〈食品安全委員会動物用医薬品専門調査会専門委員〉

H17. 9. 30まで

座長	三森	国敏
座長代理	井上	松久
	青木	宙
	明石	博臣
	江馬	眞
	大野	泰雄
	菅野	純
	嶋田	甚五郎
	鈴木	勝士

津田	洋幸
寺本	昭二
長尾	美奈子
中村	政幸
林	眞
藤田	正一

H17. 10. 1から

座長	三森	国敏
座長代理	井上	松久
	青木	宙
	明石	博臣
	江馬	眞
	大野	泰雄
	小川	久美子
	渋谷	淳
	嶋田	甚五郎
	鈴木	勝士

津田	修治
寺本	昭二
長尾	美奈子
中村	政幸
林	眞
藤田	正一
吉田	緑

オフロキサシンを有効成分とする鶏の飲水添加剤(オキササルジン液)の再審査に係る食品健康影響評価について

1. オキササルジン液について⁽¹⁾

オキササルジン液については、平成4年7月10日に農林水産大臣より動物用医薬品として承認を受けた後、所定の期間(6年)が経過したため再審査申請が行われた。製剤の内容については次の通りである。

①主剤

主剤はオフロキサシンである。

②効能・効果

適応症は鶏の呼吸器性マイコプラズマ病、大腸菌症で、有効菌種はマイコプラズマ・ガリセプチカム、大腸菌である。

③用法・用量

飲水1L当たりオフロキサシンとして50～100mgを均一に溶かして、または1日体重1kg当たりオフロキサシンとして5～10mgを飲水に均一に溶かして鶏(産卵鶏を除く)に3～5日間経口投与する。休薬期間は7日である。なお、本製剤については第一選択薬が無効の症例のみに使用することとされている。

④その他

防腐剤としてパラオキシ安息香酸エチル及びプロピルが使用されているが、これらは食品添加物としての使用歴があり、含有量もごく微量であることから、投与量と休薬期間を考慮すると影響は無視できると考えられる。

2. 再審査における安全性に関する知見等について

(1)ヒトに対する安全性について⁽²⁾

オキササルジン液は上記の通り国内では鶏の呼吸器性マイコプラズマ病、大腸菌症を対象に使用されており、アジアの数ヶ国でも使用実績があるが、主剤であるオフロキサシンの欧州や米国における食用動物を対象とした使用はない。EMEA、FDA、JECFAにおける評価は行われていない。日本においてADI及びMRLの設定はされていない。

(2)安全性に関する研究報告について⁽²⁾

調査期間中のMedlineを含むデータベース検索の結果、耐性菌に関する報告等が複数報告されている。

(3)承認後の副作用報告について⁽²⁾

鶏に対する安全性について、調査期間中に1,629,946羽の調査が実施され、鶏に対する新たな副作用は認められなかったとされている。

3. 再審査に係る評価について

1)残留基準設定に係る評価について

本製剤は鶏に飲水投与されるが、日本においてMRLの設定はなされていないことから、オフロキサシンのADI設定について別添の通り評価を実施した。オフロキサシンの残留基準設定に係る食品健康影響評価については、ADIとして次の値を採用することが適当と考えられる。

オフロキサシン 0.005mg/kg体重/日

2)薬剤耐性菌に係る評価について

本剤の再審査に係る評価については、薬剤耐性菌を介した影響について考慮する必要がある。

り、これについてはなお検討中である。

<出 典>

- (1) オキサリジン液 再審査申請書(未公表)
- (2) オキサリジン液 再審査申請書添付資料:効能又は効果及び安全性についての調査資料(未公表)

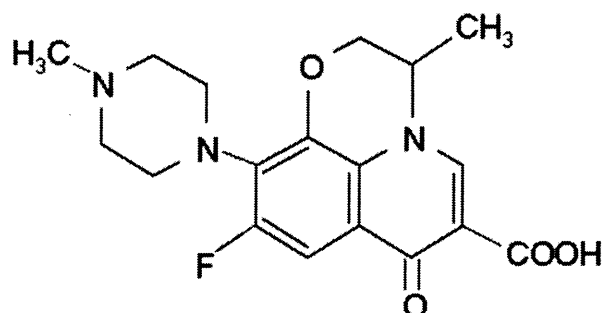
(別添)

オフロキサシンの食品健康影響評価について

1. 薬剤の概要

(1) 物質名^{(1),(2)}

オフロキサシン(Ofloxacin)



分 子 式 : $C_{18}H_{20}FN_3O_4$

分 子 量 : 361.37

常温における性状 : 帯微黄白色～淡黄白色の結晶または結晶性粉末

融 点 : 260～270°C (分解)

溶 解 度 : 2 g/L (20°C)

蒸 気 圧 : nonvolatile

(2) 効能・効果

オフロキサシンはニューキノロン^a剤に属し、グラム陰性菌に加え、多くのグラム陽性菌に対しても有効である。作用は殺菌的であり、細菌のⅡ型トポイソメラーゼ^bである DNA ジャイレース、あるいはトポイソメラーゼⅣに作用し DNA 複製を阻害するものと考えられている⁽³⁾。オフロキサシンは2つの光学異性体のラセミ体であるが、(S)-(-)アイソマーが(R)-(+)-アイソマーと比較してより強い抗菌活性を示し、オフロキサシンが示す抗菌活性の主要をなすことが明らかになっている。現在、(S)-(-)アイソマーは単独でレボフロキサシン(Levofloxacin)として利用されている。

(3) その他

オフロキサシンを主剤とする動物用医薬品は、国内では鶏の呼吸器性マイコプラズマ病、大腸菌症を対象に使用されている。欧州、米国では食用動物に対しては使用されていない。また、オフロキサシン及びレボフロキサシンはヒト臨床において上・下気道感染症や尿路感染症の治療薬として使用されている。

^a ノルフロキサシン以降に合成された塩基性環の6位にフッ素、7位に環状塩基性基を有するキノロン薬を総称して言う。

^b DNA 鎖に一時的な切れ目を導入し、閉環 DNA の超らせんの程度の調節や連環状二量体の形成・解除に作用する。

2. 毒性試験の概要

2-1. 吸収・分布・代謝・排泄

【マウスにおける単回投与試験】^{(4), (5)}

ICR 系マウス(雄 5 匹)におけるオフロキサシン(5mg/kg 体重)の単回強制経口投与において、 T_{max} は 0.5 時間以内であり、その時の C_{max} は約 1.3 μ g/ml であった。 $T_{1/2}$ (β 相)は 1.0 時間であった。⁽⁴⁾

ICR 系マウス(雄最低 8 匹/群)にオフロキサシン 40mg/kg を経口あるいは筋肉内投与し、最長 180 分までの血液を経時的に採取した。 C_{max} は経口投与で 14.5 μ g/mL、筋肉内投与で 16.8 μ g/mL、 $T_{1/2}$ (β 相)はそれぞれ 46 と 45 分、AUC は 15.1 と 23.5 μ g $\cdot$ h/mL で生物学的利用率は 64%であった。また、24 時間までの尿から経口投与で 39.5%、筋肉内投与で 35.1%が回収された。⁽⁵⁾

【ラットにおける単回投与試験】⁽⁴⁾

Wistar 系ラット(5 匹；性別不明)におけるオフロキサシン(5mg/kg 体重)の単回強制経口投与において、 T_{max} は 0.5 時間以内であり、その時の C_{max} は約 1.7 μ g/ml であった。 $T_{1/2}$ (β 相)は 1.8 時間であった。

Wistar 系ラット(3 匹；性別不明)にオフロキサシン(10mg/kg 体重)を単回強制経口投与し、投与 0.5、1、2 時間後の血清中及び各組織中濃度が測定された。心臓、肝臓、腎臓、脾臓、筋肉、小腸のいずれにおいても血清中より高い濃度が検出されたが、特に肝臓、腎臓、小腸で高く認められた。しかしながら、いずれの器官においても経時的な減少傾向を示し、蓄積性は認められなかった。脳からはほとんど検出されなかった。

【イヌにおける単回投与試験】⁽⁶⁾

雄ビーグル犬(各 3 頭/群)におけるオフロキサシン(5、10、20mg/kg 体重)の 7 日間の反復強制経口投与において、投与初日と 7 日目の T_{max} 、 C_{max} 、 $T_{1/2}$ (β 相)に差は認められなかった。

投与初日の T_{max} は用量順に 1.7、1.0、1.7 時間、その時の C_{max} は約 3.4、6.8、12.1 μ g/mL、 $T_{1/2}$ (β 相)は 5.2、4.3、4.8 時間であった。投与 7 日目の T_{max} は用量順に 2.0、1.0、2.0 時間、その時の C_{max} は約 3.3、6.0、11.5 μ g/mL、 $T_{1/2}$ (β 相)は 5.2、4.7、4.5 時間であった。

【鶏における単回投与試験】⁽⁷⁾

ブロイラー(雄 5 羽/群)にオフロキサシン(12.5、25、50mg/kg 体重)を単回強制経口投与し、0.25、0.5、1、2、4、6、8、12、24 時間後の血清中薬物濃度の消長が測定されている。 T_{max} は投与量順に 1、1.6、2.4 時間であり、その時の C_{max} は 5.8、8.5、12.9 μ g/mL、 $T_{1/2}$ (β 相)は 1.73、2.47、2.58 時間であった。いずれも 24 時間後には検出限界未満(0.8ppm)となった。

雄ブロイラーにオフロキサシン 25mg/kg 体重を単回強制経口投与し、1、2、4、6、8、12、24 時間後に 5 羽ずつを用いて組織中薬物濃度の消長が測定されている。各組織の T_{max} は筋肉が 2 時間、腎臓、肝臓、脾臓、肺、心臓は 1 時間で、 C_{max} は順に 9.4、44.7、37.6、10.7、8.8、6.9 μ g/g、 $T_{1/2}$ (β 相)は順に 1.35、2.11、1.82、1.85、1.28、1.75 時間であった。いずれも 24 時間後には検出限界未満となった。

採卵用 SPF 鶏ライン S(雄 3 羽)にオフロキサシン 100mg/kg 体重を強制経口投与し、24 時間までの尿を採取した[°]。TLC では未変化体、N-脱メチル化体の 2 スポットが認められた。HPLC を用いた定量による未変化

[°] 総排泄量から尿のみ排泄されるよう処置

体:N-脱メチル化体比は最大でも 1:0.0044 であった。

【ヒトボランティアにおける投与試験】^{(8), (9), (10), (11)}

6名の健康ボランティア(女性5、男性1)に200mgのオフロキサシンを12時間間隔で1日2回を3.5日間(合計7回)経口投与し、投与前及び最終投与後0.25、0.5、1、1.5、2、3、6、12、27、36時間後に血液が採取された。本試験における T_{max} は1.9時間(0.5-3.0時間)、その時の C_{max} は $2.96\mu\text{g/mL}$ ($2.17\text{--}4.01\mu\text{g/mL}$)、 $T_{1/2}(\beta\text{相})$ は6.6時間(6.5-7.0時間)であった。⁽⁸⁾

14名の男性健康ボランティアに400mgのオフロキサシンを12時間間隔で1日2回を3.5日間(合計7回)経口投与し、1及び7回目の投与の際に投与前及び投与後0.25、0.5、1、1.5、2、3、6、12時間後の血液を採取した。7回目についてはさらに投与後16、20、24、28及び32時間後の血液も採取した。初回投与後における T_{max} は1.5時間、その時の C_{max} は $4.5\mu\text{g/mL}$ 、 $T_{1/2}(\beta\text{相})$ は4.6時間、7回目の投与後における T_{max} は1.8時間、その時の C_{max} は $6.5\mu\text{g/mL}$ 、 $T_{1/2}(\beta\text{相})$ は6.5時間であった。⁽⁹⁾

6名の健康ボランティアに600mgのオフロキサシンを単回経口投与したときの T_{max} は1.2時間、その時の C_{max} は $10.7\mu\text{g/mL}$ 、 $T_{1/2}(\beta\text{相})$ は7時間であった。また、48時間までに80.3%が尿中に排泄された。⁽¹⁰⁾

10名の健康ボランティア(男女各5名)に100あるいは200mgのオフロキサシンを静脈内投与したときの $T_{1/2}(\beta\text{相})$ はそれぞれ約4.5、4.2時間でAUCは7.3、 $14.4\text{mg}\cdot\text{h/L}$ であった。また、24時間までに73.1、77.0%が尿中に排泄された。同じボランティアに200あるいは400mgのオフロキサシンを経口投与したときの T_{max} はそれぞれ約1.3、1.9時間、その時の C_{max} は2.19、 $3.51\mu\text{g/mL}$ 、 $T_{1/2}(\beta\text{相})$ は約5.6、4.9時間で、AUCは14.6、 $28.0\text{mg}\cdot\text{h/L}$ であった。また、24時間までに73.6、73.3%が尿中に排泄された。経口及び静脈投与時のAUCの比較からオフロキサシンの生物学的利用率は極めて高いと考えられた。代謝物について、200mgを経口、静脈内投与したときの尿を分析したところ、未変化体が73.6、77.0%、脱メチル化体が3.0、3.2%、N-オキサイドが1.0、1.1%であった。その他グルクロン酸抱合体が胆汁あるいは糞中に3.9%認められたと報告されている。⁽¹¹⁾

【鶏における7日間経口投与試験】

ブロイラーに200ppmのオフロキサシン溶液を飲水投与し、1、3、5、7、10日後の血清及び皮膚、脂肪、筋肉、肝臓、腎臓中の薬物濃度が測定されている。投与終了直後の濃度は腎臓で最も高く12.9ppm、次いで肝臓10.6ppm、筋肉5.3ppm、皮膚2.4ppm、血清2.0ppm、脂肪0.6ppmであり、経時的に減衰して5日後には全て定量限界未満(0.02ppm)となった。⁽¹²⁾

ブロイラーに100あるいは200ppmのオフロキサシン溶液を飲水投与し、1、3、5、7、9日後の血清及び皮膚、脂肪、筋肉、肝臓、腎臓中の薬物濃度が測定されている。100ppm投与群の投与終了直後の濃度は肝臓で最も高く3.3ppm、次いで腎臓3.2ppm、筋肉0.88ppm、血清0.62ppm、皮膚0.29ppm、脂肪0.21ppmであり、経時的に減衰して3日後には全て定量限界未満(0.05ppm)となった。200ppm投与群の投与終了直後の濃度は肝臓で最も高く6.5ppm、次いで腎臓5.5ppm、筋肉4.8ppm、血清0.95ppm、脂肪0.54ppm、皮膚0.40ppmであり、経時的に減衰して3日後には全て定量限界未満(0.05ppm)となった。⁽¹³⁾

2-2.毒性試験

(1)急性毒性試験^{(14), (15), (16)}

オフロキサシンの経口投与による LD_{50} はマウス(Std:ddY系)の雌で 5290mg/kg 体重、雄で 5450mg/kg

体重、ラット(Wistar 系)の雌で 3750mg/kg 体重、雄で 3590mg/kg 体重、イヌ(ビーグル)では雌雄とも>200mg^d、リスザルの雄で 500-1000mg/kg^eであった。静脈内投与では、マウス(Std:ddy 系)の雌で 233mg/kg 体重、雄で 208mg/kg 体重、ラット(Wistar 系)の雌で 276mg/kg 体重、雄で 273mg/kg 体重、イヌ(ビーグル)では雌雄とも>70mg^fであった。皮下投与ではマウス(Std:ddy 系)では雌雄とも>10000mg/kg 体重、ラット(Wistar 系)の雌で 9000mg/kg 体重、雄で 7070mg/kg 体重であった^g。(14)

また、主要代謝物である N-脱メチル体をマウス(Slc:ddY)に静脈投与した場合の LD₅₀ は雌で 40.2mg/kg 体重、雄で 38.5mg/kg 体重で未変化体より強い急性毒性を示した。(15)

レボフロキサシンの経口投与による LD₅₀ はマウス(Std:ddY 系)の雌で 1803mg/kg 体重、雄で 1881mg/kg 体重、ラット(SD)の雌で 1507mg/kg 体重、雄で 1478mg/kg 体重、カンクイザルの雌で>250mg/kg 体重であった。(16)

(2) 亜急性毒性試験

【ラットを用いた 4 週間亜急性毒性試験】⁽¹⁷⁾

約 6 週齢の Slc:Sprague-Dawley 系ラット(雌雄各 5 匹/群)を用いた強制経口(0、30、90、270、810 mg/kg 体重/日)投与における 4 週間の亜急性毒性試験において認められた毒性所見は以下の通りであった。なお、試験期間中に 810mg 投与群の雌雄各 1 匹が死亡したが、剖検所見から気管内への誤投与が原因と考えられた。

一般的な臨床症状観察では、270mg 以上の投与群で流涎、軟便、尿道口周囲の汚れ及び粗毛が認められた。

体重変化では、270mg 以上投与群の雄で体重増加量が減少していた。統計学的に有意ではないが 90mg 投与群の雄でも体重増加の低値が認められた。雄の 270mg 以上投与群の最終体重は対照群と比較して低値を示した。

摂餌量では、270mg 以上投与群の雌雄で投与の初期に減少傾向が認められたが、その後差は認められなくなった。飲水量は 270mg 以上の投与群で用量相関的に増加していた。

眼検査(眼底カメラ)、聴覚検査^h、心電図検査では投与に起因した異常は認められなかった。

血液学、血液生化学的検査は投与終了時についてのみ実施されている。

血液学的検査では、雌の全ての投与群で好中球の減少が認められたが用量相関性はなかった。810mg 投与群の雄で Hb の増加と骨髓液の顆粒球/赤芽球比の低値が認められた。

血液生化学的検査では、90mg 以上投与群の雄及び 810mg 投与群の雌でビリルビンの低値が認められたが、雄では用量相関性は認められなかった。また、810mg 投与群の雌雄で無機リン酸の高値、雄で AP、Cl⁻の高値、BUN の低値、総たん白質の低値、雌で Tcho の高値、ロイシンアミノペプチダーゼの低値が認められた。

尿検査は投与 4 週目の始めのみ実施されているが、270mg 以上投与群の雌雄で Na⁺の排泄量の用量相

^d 200, 400mg の 2 用量について実施し、死亡は認められなかったが嘔吐が観察された(1/2、2/2)。

^e 500mg で死亡なし(0/3)、1000mg ではすべて死亡(4/4)

^f 50, 70mg で死亡なし(各 0/2)、100mg で 1 頭死亡(1/2)

^g 皮下投与では投与部位に薬剤の残留が認められ、吸収が不十分であったと考えられた。

^h ガルトン笛に対する Preyer's 反射の観察

関的な減少が認められた。

臓器重量では、雌の全ての投与群と雄の 90mg 投与群で盲腸の相対及び絶対重量の増加が認められた。810mg 投与群の雌雄で心臓の相対及び絶対重量の低値、雄で肺の相対及び絶対重量の低値が認められた。心臓については 270mg 投与群の雌で相対重量の低値が認められた。その他、270mg 以上投与群の雌で脳の絶対重量の低値、810mg 投与群の雄で腎臓の絶対重量の低値が認められた。盲腸を除き、これらに関連する生化学的あるいは病理組織学的所見は認められなかった。

剖検及び病理組織学的検査では、盲腸の拡張が全ての投与群で認められ、病理組織学的には吸収上皮細胞の腫大が 810mg 投与群の雌雄で認められた。270mg 以上の投与群で十二指腸又は空腸の粘液原増加を伴う杯細胞の軽度の腫大・増数が認められた。810mg 投与群の雄で大腿骨及び上腕骨遠位端の関節軟骨表層部における基質の限局性粗しょう化が認められた。その他の臓器・組織には、特に被験物質投与に起因した異常は認められなかった。

本試験においては、全ての投与群で盲腸重量の増加、盲腸の拡張が認められたが、この盲腸の所見はオフロキサシンの抗菌活性に由来する腸内細菌叢の変動の二次的影響と考えられたため NOAEL は 90mg/kg 体重と判断された。

【ラットを用いた 26 週間亜急性毒性試験】⁽¹⁸⁾

約 5 週齢の Slc:Sprague-Dawley 系ラット(雌雄各 15 匹/群、対照群と最高用量群は 25 匹/群)を用いた強制経口(0、10、30、90、270 mg/kg 体重/日)投与における 26 週間の亜急性毒性試験において認められた毒性所見は以下の通りであった。なお、各投与群の雌雄各 5 匹は 13 週時点で安楽死させ、尿、血液学、血液生化学、剖検、病理組織学的検査を実施した。また、対照群と最高用量群の雌雄各 5 匹について投与終了後 5 週及び 13 週の回復期間が設定された。

一般的な臨床症状観察では、90mg 以上投与群で流涎、270mg 以上の投与群で軟便、尿道口周囲の汚れが認められた。

体重、摂餌量、飲水量は週 1 回の頻度で測定されている。

体重変化では、270mg 投与群の雄で初期の体重増加量が減少していた他、体重増加量、最終体重とも被験物質の投与に起因した影響は認められなかった。

摂餌量では、270mg 投与群の雄で投与 1 週目に減少傾向が認められたが、その後差は認められなくなった。飲水量は 270mg 投与群の雌雄で増加していた。

眼検査(眼底カメラ)、聴覚検査ⁱでは投与に起因した異常は認められなかった。心電図検査では心拍数及び QRS 間隔に軽度の変動が見られたが、値は正常範囲内であった。

血液学、血液生化学的検査は 13 週と 26 週の投与終了時についてのみ実施されている。

血液学的検査では、13 週では雌の 270mg 投与群で好中球の低値、26 週では 30mg 以上投与群の雌で好中球の減少とリンパ球の増加が認められ、270mg 投与群では WBC は増加していた。このうち、好中球の減少は 4 週間の試験でも認められた。雄ではこれらの変化は認められなかった。

血液生化学的検査では、13 週では 270mg 投与群の雄で AP の高値、雌でアルブミンの高値が認められた。26 週では雌の 270mg 投与群で AST、無機リン酸、Tcho の高値が認められた。雄の全ての投与群でアルブミンの高値と、30mg 以上投与群ではアルブミン/グロブリン比の高値が認められたが、用量相関性は定かではなかった。その他には被験物質の投与に起因した異常は認められなかった。

ⁱ ガルトン笛に対する Preyer's 反射の観察

尿検査は投与 13 週及び 26 週の投与終了後のみ実施されている。13 週では 270mg 投与群の雄で Na^+ の排泄量の減少が認められた。これは 10mg 投与群の雄でも認められたが、13 週の雌、26 週の雄では認められず、26 週の雌の 90mg 投与群では増加していた。26 週では雄の 90mg 以上投与群で pH の高値、雌では Cl^- の高値が認められた。その他には特に被験物質の投与に起因した異常は認められなかった。

臓器重量では、13 週の剖検では 30mg 以上投与群の雄で盲腸の相対及び絶対重量の増加が認められ、雌では盲腸の相対重量の増加が 30mg 以上投与群で認められ、270mg 投与群では絶対重量も増加していた。26 週の剖検では、盲腸の相対及び絶対重量の増加が雌の 30mg 投与群及び 90mg 以上投与群の雌雄で認められた。その他、90mg 以上投与群の雌で脾臓の相対及び絶対重量の増加、270mg 投与群の雌で甲状腺と副腎の相対及び絶対重量の増加が認められた。脾臓について病理組織学的異常は認められなかった。また、盲腸、副腎の変化は投与中止後 5 週、13 週の回復期間に回復した。

剖検及び病理組織学的検査では、13 週では雄の 30mg 以上投与群と雌の 90mg 以上投与群に、26 週の時点では盲腸の拡張が 30mg 以上投与群の雌雄で認められたが、病理組織学的な異常は認められなかった。また、大腿骨遠位端の関節軟骨の異常が対照群を含めて全ての群で認められたが、その発生頻度と程度は 30mg 以下の投与群では対照群と同様であったのに対し、90mg 以上投与群では強く認められた。副腎の束状帯細胞に脂質滴の軽度の増加が 26 週の 270mg 投与群の雌雄で認められた。

本試験においては、全ての投与群で盲腸の拡張が認められたが、この盲腸の所見はオフロキサシンの抗菌活性に由来する腸内細菌叢の変動の二次的影響と考えられたため NOAEL は 10mg/kg 体重と判断された。

【ラットを用いたレボフロキサシンの 26 週間亜急性毒性試験】⁽¹⁹⁾

約 5 週齢の CD(SD)ラット(雌雄各 20 匹/群)を用いた強制経口(0、20、80、320 mg/kg 体重/日)投与における 26 週間の亜急性毒性試験において認められた毒性所見は以下の通りであった。

一般的な臨床症状観察では、80mg 以上投与群で流涎、320mg 投与群で大きめの糞、被毛の汚れが認められた。

体重、摂餌量は週 1 回の頻度で測定されている。

体重変化では、被験物質の投与に起因した影響は認められなかったが、摂餌量は、80mg 以上投与群でやや増加していた。

眼検査、心電図検査では被験物質の投与に起因した影響は認められなかった。

血液学、血液生化学的検査は 26 週の投与終了時についてのみ実施されている。

血液学的検査では、全ての投与群の雌雄で好中球の低値が認められたが、WBC や骨髄に影響は認められなかった。

血液生化学的検査では、雄の全ての投与群で LDH、クレアチニン、 Ca^{2+} の高値が認められたが用量相関性はなく、80mg 以上投与群で総たん白質の低値が認められたが、A/G 比に差はなかった。雌の 320mg 投与群で AP の高値、中性脂肪の低値が認められた。ただし、これらの変化の原因と考えられる病理学的所見は認められなかった。

尿検査は 26 週のみ実施されている。80mg 以上投与群の雌雄で pH の高値が認められた。その他には特に被験物質の投与に起因した異常は認められなかった。

臓器重量では、全ての投与群で盲腸(内容物含む)の絶対重量が増加し、80mg 以上投与群では統計学的に有意となった。内容物を除去した盲腸では 80mg 以上投与群で増加傾向が認められ、雌の 320mg 投与群では有意であった。その他には特に被験物質の投与に起因した異常は認められなかった。

剖検では、延長した盲腸(elongated)が 80mg 以上投与群の雌雄で、盲腸の拡張が雄の全ての投与群と 320mg 投与群の雌で認められた。胃の腺粘膜(glandular mucosa)の肥厚が雄の全ての投与群と雌の 20 及び 320mg 投与群で認められたがこれは病理組織学的異常を伴っていなかった。

病理組織学的検査では 320mg 投与群で盲腸粘膜の杯細胞が対照群と比較して顕著に認められた。胃には顕著な異常は認められなかった。

本試験において関節影響は認められなかったが、先だって実施された 4 週間の亜急性毒性試験では水疱形成が認められている。筆者らは試験期間中の回復が関与しているのではないかと推測している。

本試験においては、全ての投与群で盲腸の拡張が認められたが、この盲腸の所見はオフロキサシンの抗菌活性に由来する腸内細菌叢の変動の二次的影響と考えられたため NOAEL は 20mg/kg 体重と判断された。

【サルを用いたレボフロキサシンの 26 週間亜急性毒性試験】⁽¹⁹⁾

2-4 齢のカニクイザル(雌雄各 4 匹/群)を用いた強制経口(0、10、25、62.5mg/kg 体重/日)投与における 26 週間の亜急性毒性試験が実施されている。

一般的な臨床症状観察、体重変化、摂餌量、眼検査(直接検眼鏡)、心電図検査、血液学的検査、血液生化学的検査、尿検査、臓器重量、剖検、病理組織学的検査に被験物質の投与に起因した影響は認められなかった。

なお、体重、摂餌量は週 1 回の頻度、眼検査は 26 週のみ、心電図検査は 25 週のみ、採血は 25 週のみ、採尿は 26 週のみ実施されている。

本試験における NOAEL は 62.5mg/kg 体重/日であった。

(3)慢性毒性試験

慢性毒性試験・発がん性試験は実施されていない。

発がんプロモーション作用について種々の発がん物質であらかじめ処置されたラットに対するレボフロキサシンの影響が報告されている。

あらかじめ 3 種の発がん性物質(DEN ; diethylnitrosamine、MNU ; N-methylnitrosourea、DHPN ; dihydroxy-di-N-propylnitrosamine)で処理(DMD 処理)した雄ラット(F344/Du Crj ; 1 群 15 匹)に、被験物質(レボフロキサシン(LV ; 0.9%混餌投与)を 16 週間投与した試験において、これらの発がん物質の標的となる臓器である、肝臓、腎臓、前立腺、肺、前胃、腺胃、甲状腺等における腫瘍発生について、プロモーション作用は認められなかった。⁽²⁰⁾

(4)繁殖毒性試験及び催奇形性試験

2 世代繁殖試験は実施されていない。

【ラットを用いた妊娠前及び妊娠初期投与試験】⁽²¹⁾

Slc:SD 系ラット(雌雄各 24 匹/群)を用いた強制経口 (0、10、60、360mg/kg 体重/日)投与による試験を行った。被験物質の投与は、雄では交配前 9 週間及び交配期間中(最長 2 週間)とし、雌では交配の 2 週間前から妊娠 7 日まで行った。雄は交配終了後、雌は妊娠 21 日に安楽死させた。一般的な臨床症状観察では、

^j LV 処理対照群、LV 処理群は 16 匹

360mg 投与群の雌雄で投与直後に流涎が認められた。雄で軟便及び下痢、雌で尿失禁が散見された。10 mg 投与群の雌雄親動物の体重、摂餌量及び摂水量に投与に起因した変化はみられなかった。60 mg 投与群では雄の摂水量増加及び雌の摂餌量・摂水量の減少、360mg 投与群では雄の体重増加抑制、雌雄の摂餌量の増減、摂水量の増加が認められた。母動物の性周期、交尾率、受胎率に異常は認められなかった。

黄体数、着床数、着床率、生存胎児数、胚／胎児死亡率、生存胎児体重、性比に投与の影響は認められなかった。何れの群の胎児にも外表異常は観察されなかった。胎児の骨格及び内部器官の検査では投与に関連した異常は観察されなかった。本試験における NOAEL は、親動物の一般毒性に対して 10mg/kg 体重/日、生殖発生毒性に対して 360 mg/kg 体重/日であった。

【ラットを用いた胎児の器官形成期投与試験(催奇形性試験)】⁽²²⁾

Slc:SD 系ラット(雌 36 匹/群)を用いた強制経口 (0、10、90、810mg/kg 体重/日)投与による試験を行った。被験物質の投与は、F₀ 雌の妊娠 7 日から 17 日まで行い各群 24 匹を妊娠 21 日に剖検した。12 匹の F₀ については自然分娩させ、離乳まで F₁ 児を哺育させ、11-15 週齢の同群内の雌雄の F₁ を交配妊娠させ、妊娠 21 日に剖検し、F₂ への影響を調べた。

F₀ 母動物の一般的な臨床症状観察では、810mg 投与群でほぼ全例に流涎、少数例に被毛の汚れ、軟便及び尿失禁がみられた。810mg 投与群で、妊娠後期に体重増加抑制が認められ、摂餌量及び摂水量では投与初期の減少、その後の増加がみられた。

F₀ 母動物の黄体数、着床数、着床率、生存胎児数、妊娠期間に投与の影響は認められなかった。810mg 投与群で胚／胎児死亡率の上昇がみられ、90 mg 以上投与群で胎児体重の低下が観察された。F₁ 胎児の外表及び内部器官の検査では投与の影響は認められなかった。骨格検査では、90mg 以上投与群で前肢基節骨、後肢基節骨、尾椎骨等で化骨遅延が認められ、810mg 投与群では胸骨核及び中足骨の化骨不全、頸肋、第 13 肋骨短小の出現率の上昇がみられた。奇形胎児の出現率に投与の影響はみられなかった。

F₁ 出生児の性比に異常は認められなかった。810mg 投与群の F₁ 動物において、生後 4 日までの生存率低下、雄の生後 0 日-11 週及び雌の生後 0 日-7 週で体重の低値がみられた。F₁ 動物の耳介展開、背部発毛、切歯萌出、眼瞼開裂に被験物質の投与による異常は認められなかった。離乳後の視覚及び聴覚機能^k、情動性、学習能に投与の影響は認められなかったが、810 mg 投与群の雄において自発運動量の可逆性の低下が観察された。

F₁ の精巣下降、膣開口、交尾率、妊娠率、黄体数、着床数、生存胎児数、胚/胎児死亡数、胎児性比、生存胎児体重等の F₁/F₂ の生殖発生毒性指標に投与による影響は認められなかった。

本試験における NOAEL は、母動物に対して 90mg/kg 体重/日、胎児に対して 10mg/kg 体重/日であった。催奇形性は 810mg/kg 体重/日の用量まで認められなかった。

【ラットを用いた周産期及び授乳期投与試験】⁽²³⁾

SD ラット(妊娠雌 20-24 匹/群)を用いた強制経口 (0、10、60、360mg/kg 体重/日)投与による試験を行った。被験物質の投与は、F₀ の妊娠 17 日から分娩後 20 日まで行った。F₀ を自然分娩させ、離乳まで F₁ 児を哺育させ、F₁ の成長、行動、生殖能を調べ、同群内の雌雄の F₁ を交配妊娠させ、F₂ への影響を調べた。

母動物への影響として、60mg 投与群で F₀ の摂餌量及び摂水量の増加、360mg 投与群で妊娠期間中の摂餌量減少、授乳期間中の摂餌量と摂水量の増加が認められた。

妊娠期間、分娩状態、着床数、出生児数、出生児体重、外表異常胎児出現率、児の生存率、成長、行動及び生殖能等の F_0 / F_1 及び F_1 / F_2 の生殖発生に投与による影響はみられなかった。本試験における母動物に対する NOAEL は 10mg/kg 体重/日、胎児に対して 360 mg/kg 体重/日であった。

【ラットを用いた骨格異常発現時期特定試験】⁽²³⁾

SD ラット(妊娠雌 5-10 匹/群)に 810mg/kg 体重/日のオフロキサシンを妊娠 7-8、9-10、11-12、13-14、15-17、または 7-17 日に強制経口投与し、胎児の骨格変異発現の感受期を調べた。妊娠 9-10 日または 7-17 日に被験物質を投与された群で、頸肋、第 13 肋骨短小の出現率が上昇した。骨格奇形及び外表奇形は認められなかった。

【ラットを用いた高用量における骨格異常発現時期投与試験】⁽²³⁾

SD ラット(妊娠雌 23-24 匹/群)に高用量のオフロキサシン(0、810、1100、1600mg/kg 体重/日)を妊娠 9-10 日に強制経口投与し、胎児に及ぼす影響が検討された。

用量依存的な胎児体重低下、化骨遅延、骨格変異(頸肋、第 13 肋骨短小、第 13 肋骨欠損等)の出現率の上昇がみられた。外表、骨格及び内部器官の奇形は認められなかった。

【ラットを用いた胎児と哺育児における骨格変異出現率比較試験】⁽²³⁾

SD ラット (妊娠雌数不明) にオフロキサシン (0、810 mg/kg 体重/日) を妊娠 9-10 日に強制経口投与し、頸肋と第 13 肋骨短小の出現率を妊娠 21 日の胎児と生後 21 日の哺育児で比較した。

頸肋は、投与群の胎児と哺育児のいずれにおいても有意に増加した。第 13 肋骨短小の出現率は投与群の胎児において有意に増加したが、生後 21 日の哺育児では対照群と差がみられず、第 13 肋骨短小は骨化遅延を意味する変化と考えられた。

【ウサギを用いた胎児の器官形成期試験(催奇形性試験)】⁽²³⁾

ニュージーランドホワイト種のウサギ(妊娠雌 10-15 匹/群)を用いた強制経口(0、10、40、160 mg/kg 体重/日)投与による催奇形性試験において、被験物質を妊娠 6 日から 18 日まで投与した。

160mg 投与群において親動物の体重及び摂餌量の減少が認められた。

黄体数、着床数、着床率、生存胎児体重に投与に関連した影響は認められなかったが、160mg 投与群において胚/胎児死亡率が上昇し生存胎児数が減少した。

外表、内部器官及び骨格奇形、化骨遅延、骨格変異の出現率に投与の影響は認められなかった。

本試験における NOAEL は母動物及び胎児に対して 40 mg/kg 体重/日であった。催奇形性は 160mg/kg 体重/日の用量まで認められなかった。